

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(解答は全て句読点、記号も一字に含める。)

A  
「春の奈良へいって、馬酔木の花ざかりを見ようとおもって、途中、木曾路をまわってきたら、おもいがけず吹雪にあいました。……」

僕は木曾の宿屋で貰った絵はがきにそんなことを書きながら、汽車の窓から猛烈に雪のふっている木曾の谷谷へたえず目をやっていた。

春のなかばだというのに、これはまたひどい荒れようだ。その寒いったらない。おまけに、車内には僕たちの外には、一しよに木曾からのりこんだ、どこか湯治にでも出かけるところらしい、商人風の夫婦づれと、もうひとり厚ぼったい冬外套をきた男の客がいるつきり。——でも、上松を過ぎる頃から、急に雪のいきおいがオトロえだし、どうかするとばあつと薄日のようなものが車内にもさしこんでくるようになった。どうせ、こんなばかばかしい寒さは此処いらだけと我慢していたが、みんな、その日ざしを慕うように、向うがわの座席に変わった。妻もとうとう読みさしの本だけもってそちら側に移っていった。僕だけ、まだときどき思い出したように雪が紛紛と散っている木曾の谷や川へたえず目をやりながら、こちらの窓ぎわにゴウジョウにがんばっていた。……

1、こんどの旅は最初から天候の工合が奇妙だ。悪いといってしまうえばそれまでだが、いいとおもえば本當に工合よくいっている。第一、きのう東京を立ってきたときからして、かなり強い吹きぶりだった。だが、朝のうちにこれほど強く降ってしまえば、ゆうがた木曾に着くまでにはとおもっていると、午すこしまえから急に小ぶりになって、まだ雪のある甲斐の山山がそんな雨の中から見えだしたときは、何んともいえませんがしかつた。そうして信濃境にさしかかる頃には、おあつらえむきに雨もすっかり上がり、富士見あたりの一帯の枯原も、雨後のせいか、何かいきいきと蘇ったような色さえ帯びてシャソウを過ぎた。そのうちにこんどは、彼方に、木曾のまつしろな山山がくつきりと

見え出してきた。……

その晩、その木曾福島<sup>ふくしま</sup>の宿に泊って、明けがた目をさまして見ると、おもいがけない吹雪だった。

「とんだものがふり出しました……」宿の女中が火を運んできながら、気の毒そうにいうのだった。「このころ、どうも

X になつてしまつて困ります。」

2、雪はいっこう苦にならない。で、けさもけさで、そんな雪の中を衝いて、僕たちは宿を立つてきたのである。

3、僕たちの乗った汽車の走っている、この木曾の谷の向うには、すっかり春めいた、明かるい空がひろがっているか、それとも、うつとうしいような雨空か、僕はときどきそれが気になりでもするように、窓に顔をくつつけるようにしながら、谷の上方を見あげてみたが、山山にさえぎられた狭い空じゅう、どこからともなく飛んできてはさかんに舞い狂っている無数の雪のほかにはなんにも見えない。そんな雪の狂舞のなかを、さつきからときおり出しぬげにはあつと薄日がさして来だしているのである。それだけでは、いかにもたよりなげな日ざしの工合だが、ことによるとこの雪国のそとに出たら、うららかな春の空がそこに待ちかまえていそうなあんばいにも見える。……

僕のすぐ隣りの席に居るのは、このへんのものらしい中年の夫婦づれで、問屋の主人かなんぞらしい男が何か小声でいうと、首に白いものを巻いた病身らしい女もおなじ位の小声で相槌<sup>あいづち</sup>を打っている。べつに僕たちに気がねをしてそんな話し方をしているような様子でもない。それはちつともこちらの気にならない。ただ、どうも気になるのは、一番向うの席にいろんな恰好<sup>かっこう</sup>をしながら寝そべっていた冬外套の男が、ときどきおもしろいように起き上つては、床のうえでひとしきり足を踏み鳴らす癖のあることだった。それがはじまると、その隣りの席で向うむきになって自分の外套で脚をつつみながら本をよんでいた妻が僕のほうをふり向いては、ちよつと顔をしかめて見せた。

4、三つ四つ小さな駅を過ぎる間、僕はあいかわらず一人だけ、木曾川に沿った窓ぎわを離れずにいたが、そのうちだんだんそんな雪もあるかないか位にしかちらつかなくなり出てきたのを、なんだか残り惜しそうに見やっていた。もう木曾路ともお別れだ。気まぐれな雪よ、旅びとの去つたあとでも、もうすこし木曾の山山にふつておれ。もうすこしの間でいい、旅びとがおまえの雪のふっている姿をどこか平原の一角から振りかえつてしみじみと見入ることができるときまで。――

そんな考えに自分がうつけたようになってるときだった。ひよいとしたはずみで、僕は隣りの夫婦づれの低い話声を耳に挿<sup>は</sup>さんだ。

「いま、向うの山に白い花がさいていたぞ。なんの花けえ？」

「あれは辛夷<sup>こいばし</sup>の花だ。」

僕はそれを聞くと、いそいで振りかえつて、身体をのり出すようにしながら、そちらがわの山<sup>d</sup>のハにその辛夷の白い花らしいものを見つけようとした。いまその夫婦たちの見た、それとおなじものでなくとも、そこいらの山には他にも辛夷の花さいた木が見られはすまいかとおもつたのである。だが、それまで一人でぼんやりと自分の窓にもたれていた僕が急にそんな風いきよときよとそこいらを見まわし出したので、隣りの夫婦のほうでも何事かといったような顔つきで僕のほうを見はじめた。僕はどうもてれくさくなって、それをしお<sup>4</sup>に、ちよつと僕とは筋向いになった座席であいかわらず熱心に本を読みつつづけている妻のほうへ立つてゆきながら、「せつかく旅に出てきたのに本ばかり読んでいる奴<sup>やつ</sup>もないもんだ。たまには山の景色でも見ろよ。……」そう言いながら、向いあい腰かけて、そちらがわの窓のそとへじつと目をそそぎ出した。

「だって、わたしなぞは、旅先きでもなければ本もゆつくり読めないんですもの。」妻はいかにも不満そうな顔をして僕のほうを見た。

「ふん、そうかな」ほんとうを云うと、僕はそんなことには何も苦情をいうつもりはなかった。ただほんのちよつとだ

けでもいい、そういう妻の注意を窓のそとに向けさせて、自分と一しよになって、そこいらの山のへにまつしろな花を簇むらがらせている辛夷の木を一二本見つけて、旅のあわれを味ってみたかったのである。

「むこうの山に辛夷の花がさいているとき。ちょっと見たいものだね。」

「あら、あれをごらんに Y の。」妻はいかにもうれしくってしようがないように僕の顔を見つめた。

「あんなにいくつも咲いていたのに……」

「嘘うそをいえ。」こんどは僕がいかに不平そうな顔をした。

「わたしなんぞは、いくら本を読んでたって、いま、どんな景色で、どんな花がさいているかぐらいはちゃんと知っていてよ。……」

「何、まぐれあたりに見えたのさ。僕はずっと木曾川の方ばかり見ていたんだもの。川の方には……」

「ほら、あそこに一本。」妻が急に僕をさえぎって山のほうを指した。

「どこに？」僕はしかし其処そこには、そう言われてみて、やっと何か白っぽいものを、ちらりと認めたような気がしただけだった。

「いまのが辛夷の花かなあ？」僕はうつけたように答えた。

「しよのない方ねえ。」妻はなんだかすっかかり得意そうだった。「いいわ。また、すぐ見つけてあげるわ。」

が、もうその花さいた木木はなかなか見あたらないらしかった。僕たちがそうやって窓に顔を一しよにくっつけて眺めてみると、目めなかいの、まだ枯れ枯れとした、春あさい山を背景にして、まだ、どこからともなく雪の5とば5ちりのようなものがちらちらと舞っているのが見えていた。

僕はもうカンネンeして、しばらくじっと目をあわせていた。とうとうこの目で見られなかった、雪国の春にまつさきに咲くというその辛夷の花が、いま、どこぞの山のへにくっきり立っている姿を、ただ、心のうちに浮かべてみていた。

そのまつしろい花からは、いましがたの雪が解けながら、その花の雫すくのようにぼたぼたと落ちてくるにちがいはなかった。

堀辰雄「辛夷の花」『大和路・信濃路』所収（新潮文庫）

問一 傍線部 a と e の片仮名を漢字に改めなさい。

問二 傍線部 A「あ」に当てはまる漢字を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 相      イ 逢      ウ 遭      エ 合

問三 傍線部 1 と 5 の言葉の意味として最も適切なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

1 「さし」

ア 動作に飽きてしまい、途中でやめてしまうこと。

イ 動作を人に薦めたいほど気に入ること。

ウ 動作が中止の状態になっっていること。

2 「おあつらえむき」

ア 希望にピタリと合っていること。

イ 自分でコントロールできないこと。

ウ 北の方角に迷わず進むこと。

エ 気持ちが落ち込んでしまうこと。

3 「うらちか」

ア 正反対の状態に順応すること。

イ 晴れて日がのどかに照っていること。

ウ 無意識に踊りだしてしまうこと。

エ 天候が季節にふさわしくないこと。

4 「しお」

ア ちょうど良い頃合い

イ 見えすいた言い訳

ウ 勢いに任せた行動

エ 物事を諦める気持ち

5 「とぼちり」

ア 受けなくて良い災難を受けること。

イ ほんの少し汚れていること。

ウ もう一歩で完全な形になること。

エ 周辺の様子が大きく変化すること。

問四 空欄

1

4

に当てはまる言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ようやく

イ きつと

ウ いま

エ それだけに

オ どうも

カ だが

キ まずは

ク またしても

ケ さつき

コ そんなふうで

問五 空欄

X

に当てはまる漢字を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 束

イ 病

ウ 炭

エ 癖

オ 石

問六 空欄

Y

に当てはまる言葉を、前後の文脈を考慮に入れて六字で答えなさい。

問七 傍線部B、妻は「すっかり得意そう」な様子である。これと同じ心境を表している部分を、十五字前後で本文中よりそのまま抜き出さない。

問八 文中で「僕」が擬人法を用い、自然や天候に呼びかけた部分がある。該当する一文を本文中より三十〜四十字で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問九 本文から次の一文が抜け落ちている。適切な位置に戻したとき、この文に続く部分の最初の五字を答えなさい。

そこで、僕はそういう妻の返事には一向とりあわずに、ただ、すこし声を低くして言った。

問十 この旅を通して夫婦の心が通い合ったことをうかがわせる行動を表した部分がある。最も適切な部分を、本文中より十五字〜二十字でそのまま抜き出さない。

問十一 文中で「僕」が「辛夷の花」を目にすることに執着したのはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 妻と一緒に出かけた旅先で、季節の花を妻だけが目にするのは納得がいかなかったから。

イ 妻と一緒に出かけた旅先で、冬のような天候に見舞われ、このままでは帰れないと思ったから。

ウ 妻と一緒に出かけた旅先で、春の訪れを感じ、旅のあわれを味わってみたかったから。

エ 妻と一緒に出かけた旅先で、絵葉書に書く材料を一つでも多く手に入れたかったから。

堀辰雄の小説『大和路・信濃路』所収の「辛夷の花」を問題文として採り上げました。半世紀以上も前の作品で、現代の小説のような刺激的な場面、表現はありませんが、木曾路を旅する年配の夫婦の、車窓に映る景色を見ながらの微笑ましいやりとりが印象に残ります。入試問題の文章ではありませんが、内容も味わって欲しいと思います。

問一 基本的な漢字の問題です。中学三年生の段階では、「読めるけど書けない」ことが、多いように感じます。日常生活の中で目にした漢字を、その場で一度書く習慣を身に付けましょう。

問二 選択肢の漢字は、すべて「あ」と読めます。それぞれを本文に当てはめ、文章に相応しい意味を発揮する文字を選択して下さい。

問三 「問二」と同様に、選択肢の文を本文に挿入して、前後の意味がスムーズにつながる物を選ぶのがポイントです。

問四 選択肢がたくさんあると、混乱してしまいそうですが、まずは消去法でいくつかに正解の候補を絞って下さい。選択肢の語句を入れる本文の、後ろの部分だけでなく、前の部分に大きなヒントが隠されていることも少なくありません。

問五 会話文の中に登場する空欄ですから、話し手の人柄や心境を考慮に入れてみて下さい。「日常会話だと、こんな言い方するよね」と実感できることでしょう。

問六 妻から夫への語りかけの一部であり、親しい人を少しだけ冷やかに霧囲気が漂っています。そこに気づけば、正解に近づくことでしょう。

問七 日頃は夫婦の会話があまり無く、旅先で思いがけないやり取りが出来たことを、妻は嬉しく思っています。字数制限等の条件に気を配って、解答して下さい。

問八 擬人法とは、人間以外のものを人間に例えて表現する方法のことです。木曾路に降る雪は人ではありません。それに向かって呼びかけている部分が、解答として目に留まると思います。

問九 「そういう妻の返事」「少し声を低くして言った」この二箇所が解答を導き出す大きなヒントになることでしょう。実際に抜け落ちた一文を当てはめて確認することも忘れずに。

問十 車窓から見える景色を共に見るうちに、夫婦の距離が縮まるのがわかります。それが具体的な行動となつた部分を探せば良いでしょう。

問十一 「妻と一緒にいること」「旅先であること」「季節の変化を感じ取っていること」これらが大切な要素です。辛夷の花そのものより、この状況をより深く味わうためには、実際に目にすることが大切だと感じていたでしょう。